

ヒューマンウェアインターンシップ報告書

3 / 4

インターンシップ体験記 (海外インターンシップの場合は英語で記入)

経緯

受け入れ先の機関は、ネット検索で見つけた。生物に関心があり、工学の知識を活かすために数理的的手法を行っている研究室を検索した。さらに、フィールドでのデータ収集を行っているという条件も加えて検索し、出てきた研究室を候補とした。

インターンを希望する研究室の方とは、事前に zoom 面談を行い、5 月ごろ(インターン開始の 3 ヶ月ほど前)に 2 週間の短期滞在を自費で行った。そこで、インターン時に取り組む研究について予備的な分析を行い、インターン開始までに勉強すべき内容を整理しておいた。

同僚・上司・教員とのコミュニケーション

受け入れ先の教授の仕事の合間を縫って、論文の計画や、ロボット工学分野と生物多様性保全の分野がどのように共同できるかといった話題について話した。専門性の高い議論にはついていくのが難しかったが、論文を紹介してもらうことで勉強していった。また、研究員の方とは具体的な研究内容のみならず、フィールドワークの方法やデータの基本的な解釈の方法を教えていただいた。午前中は業務が多い方々であったため、夕方の休憩時間に雑談のような形で気になっていることを質問することが多かった。

成長したポイントや達成できなかった課題

これまでと異なる分野の研究を行う際の準備から、研究成果をまとめるまでのプロセスを経験できたことは、成長したポイントである。研究について議論する際には、わからない言葉が出て話に入らないのではなく、質問したりインターネットで調べながら話についていくことが結果的に知識を増やすのにつながることも実感できた。

一方で、筆者の研究分野に関する知識を提供するという貢献を行うことはあまりできなかった。一度だけ、受け入れ先研究室が機械学習の研究室と行っている共同研究のミーティングに同席するという機会あった。この時には双方の専門用語を理解する参加者としていくつか質問を行ったが、このような形で貢献をもっと積極的に行いたかったと思う。

研究室とは異なる分野、業界で働いたことで得た体験

マクロ生態学研究とヒューマンロボットインタラクション研究の大きな違いは、理論に対する考え方だと感じた。マクロ生態学では既存の理論や報告されたデータのサーベイを綿密に行い、分析手段や論文のストーリーを設計する。これは、面白いアイデアを形にし、できたモノを既存の理論にてらして解釈するという研究スタイルが多いロボット研究とは対比的であった。一方で、冗長な文章を廃して論理構成を考えると、単に事実を羅列するだけではなく魅力的な文章になるよう具体例を上げることなど、論文執筆を行う際の工夫には共通することが多かった。普段と異なる分野の研究を行うことで、研究遂行において分野ごとに異なる要素と共通する要素を理解することができた。

インターンシップ体験記 (続き)

生活面

マンスリー契約のレオパレスに滞在していた。沖縄は台風が強いため、レオパレスも鉄筋コンクリート造であり沖縄以外での評判よりはよい住居であると思われる。学生はほとんどの人が車が原付を持っていた。車での移動を前提に街が作られているので、車がないとなかなか物資の確保やレクリエーションが大変である。食事は、昼は学食を食べ、夜は近所の安い(大阪と比べて特別安いこともないが)店を回っていた。9、10月はまだかなり暑いため、朝早めに起きて大学に移動し、夜は日が沈んでから帰宅することで避暑を図った。

その他、インターンシップの体験から学んだ重要だと思われること

阪大に所属している間は、起床時刻が不規則で夜ふかししてしまうことも多かった。インターン時は、先生や研究員の方々とコミュニケーションを取るために早起きしていたことから、生活リズムができていた。このような生活のほうが研究の進捗もよく、論文執筆時の頭の働きも良かったような気がする。また、技術補佐員の方々と会話することも精神的な安定に寄与した(専門的な話以外の、生活面でのアドバイスもたくさんもらった)。

休日には学生の方々と生物や文化財の観察を行った。滞在先の自然や歴史について詳しく知ること、業務に対するモチベーションが向上することも実感できた。

今回のインターンで行った研究は、マクロ生態学分野では典型的な仮説形成と分析方法を用いていた。このような内容の研究を行ったことで、分野の特徴を理解し、これまで自分が行ってきた研究との差異と共通性を実感することができた。筆者のように異分野へのインターンを行う際は、知識の融合をすぐに行おうとするよりもその専門分野での王道的な思想を習得するほうが、学べることが多いのではないかという感想を持った。